

あとがき

当画廊では山田正亮の作品を毎年秋に展示紹介してきているが、今回は「1960年代中期モノクロームの時代」の作品を展示し皆様にご高覧いただくこととなった。因みにこれまでの当画廊の山田正亮展を記すと次のとおりである。

- 第1回 1979年 1960年代後期の絵画
(2色のストライプ)
- 第2回 1980年 オイルパステルによる新作
- 第3回 1981年 1960年代前期の絵画
(多色のストライプ)
- 第4回 1982年 山田正亮1950～80
(当画廊の移転記念展)
- 第5回 1983年 油彩新作
- 第6回 1984年 水彩新作
- 第7回 1985年 1960年代中期モノクロームの絵画

すなわち、今回で1960年代の作品を通して紹介したこととなる。

今回の展覧会のカタログは前回に引き続き早見堯さんをお願いした。早見さんは山田正亮の作品を長年丁寧に追跡されている評論家である。ありがとうございました。

この展覧会に先立ち、当画廊では9月の常設展で山田正亮の1953年の静物画から現在に至る作品を20点弱展示した。これら作品を毎日眺めていて感ずることは、山田正亮が画家として志を立て、作品を発表して以来現在に至るまで終始一貫して「絵画」を追求してきているという事実である。甚だ大まかな私流の区分であるが、静物画、解体、スクエヤー、多色ストライプ、モノクローム(今回の展示)、2色ストライプ、静的分割そして現在の動的分割と30数年の間にスタイルが変わって行くが、その変化の過程をみるとそれは論理的である。と同時に作品をみて緊張感を感じることが、これはこの作家の孤独な魂と強靱な精神力が内在しているからに外ならない。中期までの作品は重く美しいのである。そして最近の作品は動きが生まれ、開放的な明るさが自然と漂って来て美しい。その明るさが私は嬉しい。

今回のモノクロームの作品は山田正亮の絵画史のなかでひとつの極点を示すものとする。すなわち多くの色彩が使用されたストライプの作品の後、一転して色彩が放棄される。色彩なくしては絵画は成立しないから、放棄というよりはひとつの色彩に収斂されるべきであろう。ではいかなる色彩に収斂されたか?それはホワイトでありシルバーであり、そしてブルーであった。すべて寒色系で温い色彩ではない。禁欲的な絵画である。

ホワイトのモノクロームの作品をみて、これでも絵ですか?!、下塗りではないの?!と卒直な質問を受けることがときどきある。私は直ちに次のように答える。「この作

品は本塗りであり、極めてデリケートで完成された美しい作品なのです。絵画のひとつの極点と考えていただきたいのです。」と。

来年の秋は山田正亮の油彩新作展を予定している。

1985年10月7日

佐谷画廊 佐谷和彦